

# 箱根・元箱根における観光と空間構成

## Tourism and Spatial Construction of Hakone and Moto-Hakone Districts

服部 陽太\*・杉本 興運\*\*・太田 慧\*\*・菊地 俊夫\*\*

Youta Hattori Koun Sugimoto Kei Ota Toshio Kikuchi

### 摘要

箱根町は江戸時代初期から栄えた長い歴史をもち、現在では日本を代表する観光地となった。本研究では、芦ノ湖岸の集落である箱根および元箱根の2つの地区に着目し、それぞれの空間構成と両者の特徴差を明らかにすることを目的とする。フィールドワークによる調査と地理情報システムによる分析を組み合わせ、両地区の詳細な土地利用や建物用途を分析した結果、元箱根地区では湖岸から近いところに観光施設、宿泊施設、交通施設が混在した観光空間が形成されているのに対し、箱根地区では湖岸付近に観光施設と交通施設を中心とした観光空間が形成されていることが明らかとなった。両地区は、芦ノ湖畔という魅力的な自然資源への近接立地、東海道沿いへの集落形成など、成立背景に関わる自然・社会基盤において共通点を有している一方で、箱根地区は関所を中心とした宿場町として、元箱根地区は箱根神社の門前町として形成されたという違いがあり、そのことが両地区の観光や空間の特徴として表れている。

### I. はじめに

箱根町は江戸時代初期から栄えた長い歴史をもち、現在では日本を代表する温泉観光地となった。明治期になると、江戸時代以来の温泉に加えて夏期の冷涼な気候と風光明媚な景観を求めて外国人の別荘が集中するようになった。第2次世界大戦後には、加山雄三の主演で映画化された「箱根山戦争」とよばれる西武グループと小田急グループの観光開発競争が起こった。このような第2次世界大戦以降の大規模な観光開発を経て、箱根湯本から大涌谷や芦ノ湖を経由して再び箱根湯本に戻る現在の回遊ルートが誕生した。箱根における主な観光資源は温泉や芦ノ湖畔の景観などの自然資源であり、江戸時代以来これらの自然資源が箱根を観光地として存立させる基盤となったのである。

これまでの箱根町に関する先行研究は、箱根町が温泉観光地として成立する過程に重点が置かれていた。たとえば、山村(1967)は箱根町における温泉観光地の成立とその背景を東京大都市圏の他の温泉観光地との比較から明らかにした。その他にも、大山(2009)は地誌学の観点から箱

根火山と温泉資源の関連をとらえ、現在の温泉観光地へと発展する過程をとらえた。以上のように、箱根町における観光発展に関する研究は盛んである。

観光地理学においては、海岸観光地における土地利用の特徴を海岸線からの距離を基準に分析することで、その地域の空間構成が明らかにされてきた(Pearce, 1995; 太田・飯塚, 2014)。これに対して、湖岸における観光地の空間構成については、山下(2001)などの研究にみられる他はこれまであまり検討されてこなかった。以上をふまえ、本研究では、芦ノ湖の湖岸集落である箱根および元箱根の2つの地区における空間構成とその差異を明らかにすることを目的とする。その際に、2つの集落が観光地として成立している背景を、その自然資源あるいは歴史的背景をふまえながら比較して検討する。これにより、現在の芦ノ湖岸における両地区の観光空間としての特徴を明らかにすることができる。

### II. 調査対象地と研究方法

#### 2.1 箱根町における観光の進展

箱根町は神奈川県南西部に位置し、東京都心部から約80kmの距離にある。大都市から日帰り旅行が可能な好立地のため、東京都市圏の居住者を中心に多くの観光客が訪れる。2013年の年間

\*首都大学東京都市環境学部自然・文化ツーリズムコース  
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 (9号館)  
e-mail hydekisten83gira@yahoo.co.jp  
\*\*首都大学東京都市環境科学研究科観光科学域

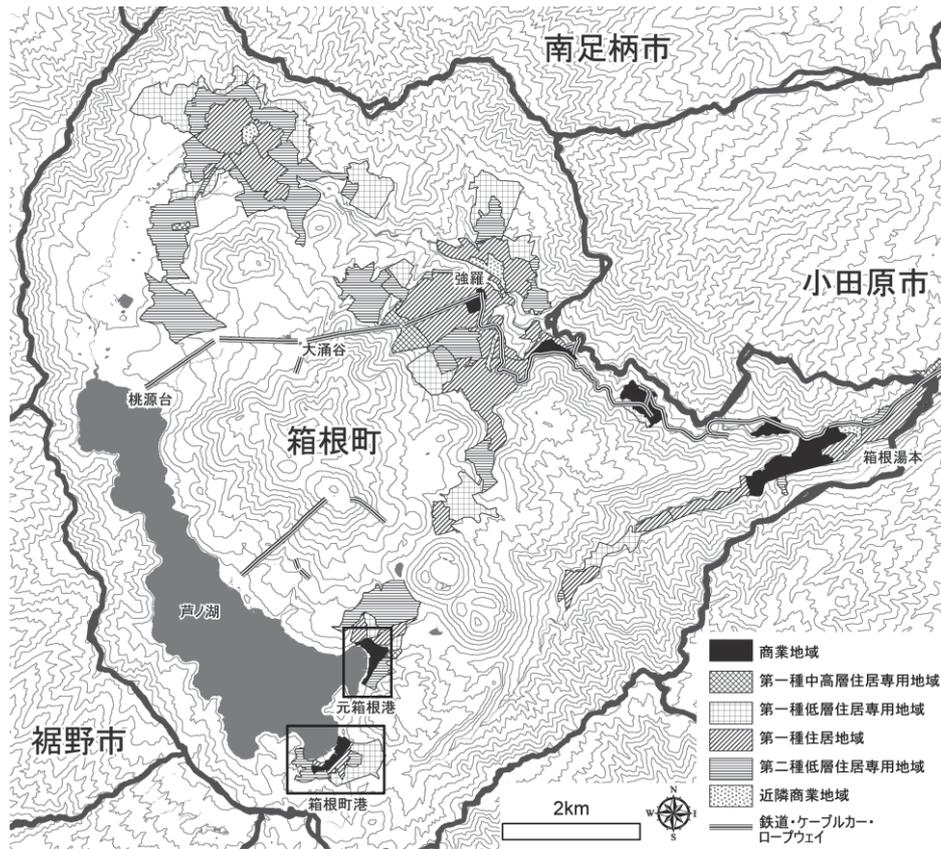


図1 研究対象地域概観

観光入込客数は 20,857 千人、年間入湯客数は全国第一位の 5,577 千人であり、全国でも有数の集客力を誇る温泉観光地である。産業は第 3 次産業に特化しており、2010 年度ではその中の就業者約 7 割がサービス業に従事している。第四紀火山である箱根山を基盤とし、そのカルデラ内部にある芦ノ湖、大涌谷、仙石原などの山岳系自然資源を中心とした数カ所の観光エリアが形成されている。また、様々な場所に温泉街が形成されており、東京都心部からの玄関口である箱根湯本の温泉街は其中で最も大きな規模を誇る。

箱根町は元々交通の要衝として発展した<sup>1)</sup>。箱根山に最初に整備された公道は鎌倉時代の湯本から三島に抜ける湯坂道であり、江戸時代の初期には湯本から箱根に通ずる東海道が整備された。そして、徳川幕府が箱根を自然の要塞とみて東海道沿いの芦ノ湖畔に関所を設けると、関所を中心とした宿場町が発展した。江戸時代後期になると、箱根七湯といわれた温泉を中心に湯治場として旅人に知られるようになった。明治時代に関所が廃止され、幹線道路が開通し交通が便利になると、箱根町は避暑地としても有名になった。大正時代

には箱根登山鉄道が湯本から強羅まで開通した。そして昭和時代には、1950 年に小田急線の開通によって箱根町が東京都心部と結ばれたことによって、日本の高度経済成長にあったことで、急速な観光開発が進められた。

## 2.2 箱根地区・元箱根地区の概要

本研究の調査対象地である箱根地区と元箱根地区は箱根町の南部かつ芦ノ湖南東部に位置する(図1)。恩賜箱根公園をはさんで南に箱根地区が、北に元箱根地区が位置する。両地区とも芦ノ湖岸の港を中心に観光施設などが広がる湖岸観光地である。中心部は都市計画法上の商業地域に指定され、その周囲が住居系用途地域に指定されている。本研究での主な分析対象とするのは、施設や住居の集中する湖岸から 400 m 以内の範囲である。

箱根地区は、芦ノ湖の湖岸から約 100 m のところを東海道が通っている。海賊船「箱根町港」がこの地区の中央にあり、箱根町港の駐車場は毎年正月に行われる箱根駅伝の往路ゴール地点ともなっている。箱根駅伝ミュージアムが駐車場に隣

接して設けられるなど、箱根地区は箱根駅伝との関わりが深い。またこの地区は、江戸時代に東海道沿いの関所として設置された箱根関所を中心に発展した宿場町であった。箱根関所は復元され観光対象となり、資料館とともに観光客を集めている。

元箱根地区は、小涌谷方面からのびる東海道が芦ノ湖畔に合流する地点のある地域であり、東海道はそのまま南の箱根地区の方へと伸びている。元箱根地区の北西には、箱根神社がある。箱根神社は757年に建立され、元箱根地区は箱根神社の門前町として栄えた。現在も鳥居が東海道にあり、門前町であった頃の雰囲気を残している。

### 2.3 研究方法

観光地の空間構成を明らかにするためには、当然ながら観光現象の表出する観光空間としての側面に着目することが必要となる。しかし、箱根地区と元箱根地区には住民の居住空間としての側面も存在するため、それら両側面を合わせて対象地区の空間構成を検討する必要がある。そこで、本研究では、観光客の観光対象となる観光関連施設の分布や構成比率に加え、住民の生活の場となる居住関連施設の分布や構成比率も合わせて分析することで、箱根地区と元箱根地区の空間をとらえることにした。

まず、フィールドワークによって調査対象地の詳細な土地利用や建物用途を調査した。調査日は2014年9月15日である。当日はゼンリン住宅地図のコピーと調査票を用意し、訪れた敷地ごとの土地利用や建物用途を、地図と調査票にそれぞれ対応付けるように記録していった。また、判別の難しい場所に関しては、聞き取りを行うか、あるいは調査後に空中写真やその他資料を利用し、土地利用を判断した。現地調査後、住宅地図をスキャンし、画像データとして保存してから、それを基に対象地内の各敷地を表す空間データを作成した。空間データ作成時にはArcGIS (ver. 10.1) のジオリファレンス機能を用い、画像データの地図を国土地理院が提供している数値地図(縮尺2,500分の1)の道路や河川の空間データを基準にマッチングし、表示した後、エディターを使用して敷地のポリゴン型空間データを作成した。データの分析では、土地利用図の作成によって箱根地区と元箱根地区の空間構成の特徴を明らかにし

た。また、湖岸からの距離による建物件数構成比をみることで、全体的な特徴を明確化した。空間の形成要因に関しては、箱根町に関する各種資料や箱根町立郷土資料館での聞き取り調査の結果をふまえて判断した。

## III. 箱根地区における空間構成

### 3.1 箱根地区の空間的土地利用

箱根海賊船「箱根町港」の周辺は、港に隣接して駐車場やバスターミナルがあり、このエリアの交通の結節点となっていることが分かる(図2)。そして、それらの周りに飲食店や土産物店などの観光施設が立ち並び、それらが一体となって観光空間を形成している。しかし、それらの観光施設に隣接して居住関連施設が並んでいる。また、居住関連施設の分布は東海道沿いの北東方向にも広がっている。箱根町港から箱根関所(写真1)にかけて、交通施設、観光施設を中心とした観光空間と、居住空間が混在していることが分かる。

湖から少し離れた斜面には、ホテルや保養所が立地し、宿泊機能に特化した空間が形成されている。箱根町港を基点とした南西方向には、北東方向とは異なり観光施設はほとんど立地していない。湖に面した場所や斜面には、一部別荘がみられる一方で、それ以外はほとんど住居となっている。このことから、居住空間の中に一部別荘地としての観光空間が存在していると捉えることができる。

### 3.2 建物件数の構成比

箱根地区の建物件数を、湖岸から200m未満と、湖岸から200m以上400m以内で集計し、構成比を図3に示す。湖岸から200m未満の建物件数構成比をみると、24.4%が観光関連施設となっており、全体的には観光空間というより、居住空間としての性質が強い。しかし、先ほどこのエリアの空間的特徴を述べたが、観光空間が一部に偏っているので、このように表されている。観光空間の内訳をみても、観光施設が47.1%と一番多く、次いで宿泊施設、別荘、交通施設の順に多い。さらに観光施設の内訳をみても、飲食店が最も多く、次いで土産物店が多い。

湖岸から200m以上400m以内の建物件数構成比をみると、観光空間が22.8%となり、湖岸から200m未満の場合とほぼ同じであった。しかし、

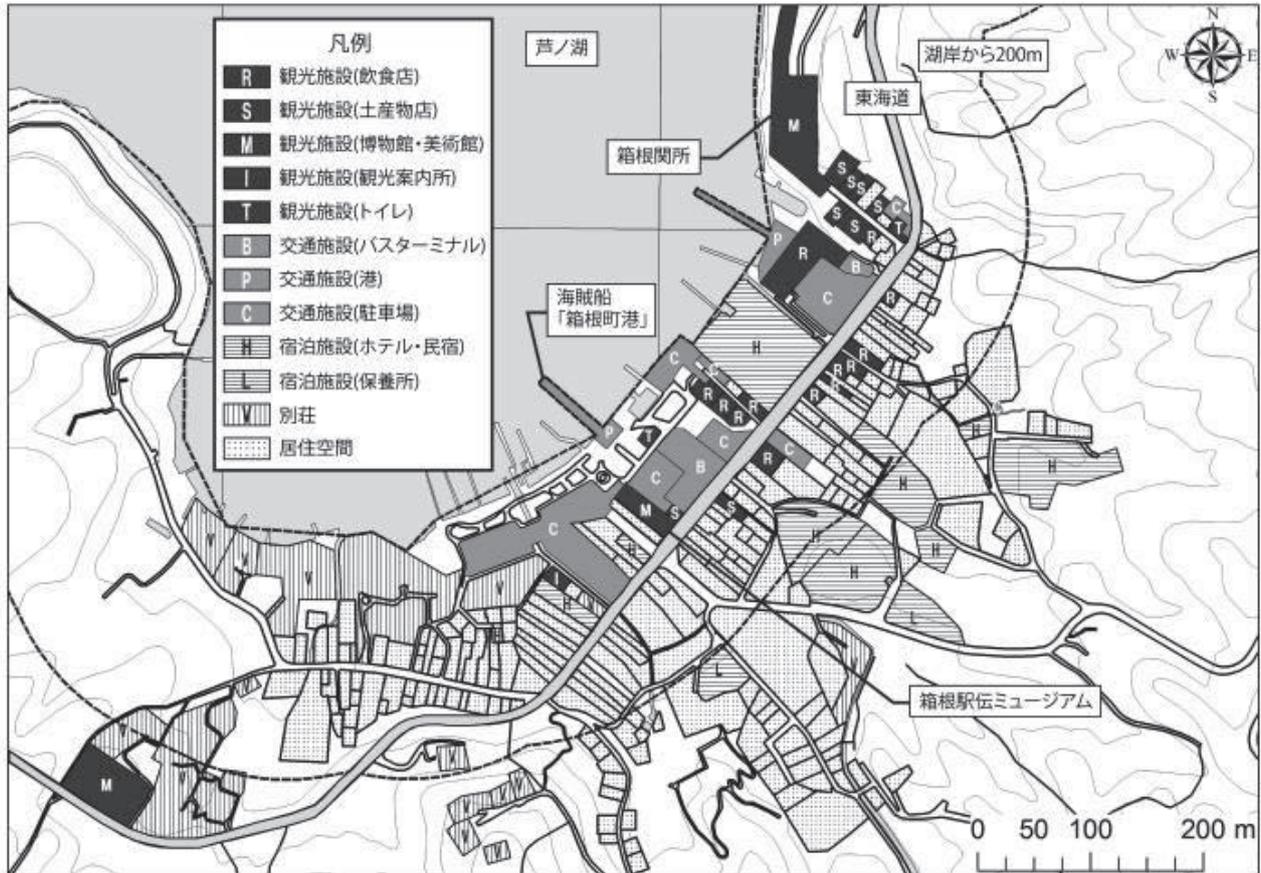


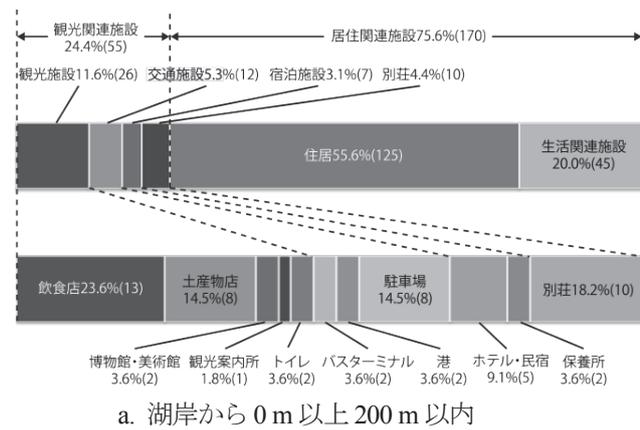
図2 箱根地区の土地利用

観光空間の内訳を見てみると、宿泊施設と別荘で大部分を占めており、観光客が宿泊するための空間として利用されていることが分かる。

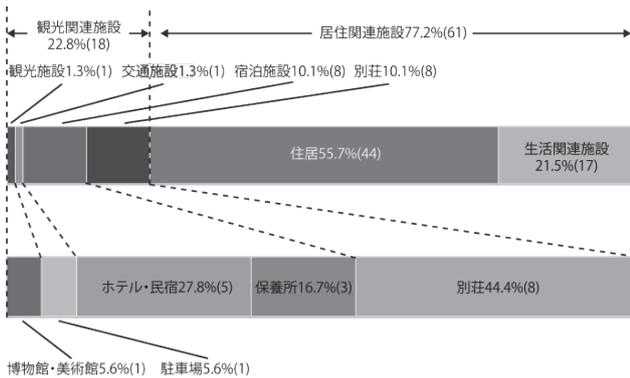
### 3.3 箱根地区の空間形成要因

箱根地区は大きくわけて3つのエリアに分類することができる。一つ目は、箱根町港から箱根関所に広がる交通施設、観光施設を中心としたエリアであり、観光客がまち歩きや景観観賞をするための観光空間として機能している。このエリアの形成要因としては、箱根関所とそれによって成立した箱根宿の存在が挙げられる。江戸時代まで東海道の関所として機能していた箱根関所は、現在復元された位置とほぼ同じ位置にあり、箱根地区の北東部にあった。箱根宿は江戸時代に宿場町として箱根関所の南西側に成立した。箱根宿は、東海道の両脇に旅籠が34軒、湖側を中心に本陣6軒が立ち並んでいた。また、それら以外にも、合計約160軒の集落が立ち並んでいた。箱根関所は、明治時代になった時に参勤交代

制度が廃止され、関所としての役割を失った。それとともに箱根宿も必要とされなくなり、旅籠はその役割を失った。現在、観光関連施設は湖岸沿いに立地しており、かつて旅籠があった位置に立地している傾向がある。これは、役割を失った旅籠が住居に変わるのではなく、観光関連施設としてあり続けたため、現在も同じ場所が観光空間となっていると考えることができる。旅籠が住居に変わらなかった要因の一つが、外国人の避暑地嗜好である。明治時代になり、日本に滞在していた外国人が夏の暑い時期に箱根を避暑地として利用していたのである。その時に外国人は本陣や旅籠などを借り長期間滞在していた。外国人は芦ノ湖を観光対象としてとらえていたため、その後も東海道と芦ノ湖に囲まれる範囲は観光利用として注目され、1935年に芦ノ湖北岸の湖尻と元箱根とを結ぶ遊覧船が就航した。年代は定かではないが、東海道と芦ノ湖に囲まれる範囲にあった旅籠や本陣がなくなり、その後芦ノ湖での遊覧などを主とした観光空間が形成されていったこと



a. 湖岸から 0 m 以上 200 m 以内



b. 湖岸から 200 m 以上 400 m 以内

図3 箱根地区の建物構成比とその件数

ほとんどないと考えられる。このエリアは、宿場町であった江戸時代から居住地であり、箱根町が観光地として注目されるようになってからも観光関連施設にとって代わることはなかった。しかし、別荘がいくつか立地していることから、別荘地として開発されたことがわかる。湖岸には比較的規模の大きい別荘が立地しているが、これは大手不動産会社によって計画的に開発されたのではなく、個人によって開発された。



写真1 箱根地区の箱根関所(2014年9月14日に著者ら撮影)

がわかる。1964年には箱根海賊船が就航し、箱根町港に近接して神奈川県営の駐車場が整備された。東海道と芦ノ湖に囲まれる範囲は旅籠や本陣の跡地を利用して港や駐車場が整備されたため、この範囲は観光空間としての特性は残しているものの、宿場町の町割りの特徴である短冊状の区画ではなくなった。一方、東海道の芦ノ湖に対して反対側は、短冊状の町割りが残されていることから、宿場町の町割りが当時のまま利用されていることがわかる。

二つ目は、湖岸からおよそ200m以上離れた斜面に広がる、宿泊施設を中心としたエリアである。ここは宿泊機能に特化した空間と言える。敷地の広いホテルなどの宿泊施設が立地しているが、これは昭和期の観光開発の時期まで大きな土地開発がされず、土地が残されていたことが大きな要因として考えられる。東海道のある湖畔付近は宿場町時代から既に開発がなされ、土地が余っておらず、後発組である大きな敷地を要する宿泊施設の多くは、湖畔から離れたところに建設されることになったのである。

三つ目は、箱根町港より南西方向に広がるエリアである。観光施設や宿泊施設がほとんどなく居住地が多く集積しているため、観光客が立ち寄ることは

#### IV. 元箱根地区における空間構成

##### 4.1 元箱根地区の土地利用

湖岸沿いを走る、東海道とそれに付随する道路の両脇に、駐車場やバスターミナルといった交通施設、飲食店や土産物店といった観光関連施設、ホテル・民宿といった宿泊施設が立ち並び、観光空間を形成している(図4)。周辺には住居も存在し、居住空間と観光空間が混在していることが分かる。

湖から少し離れた斜面には別荘が多数立地し、湖岸近くとは特色の異なる観光空間が形成されている。

##### 4.2 建物件数の構成比

元箱根地区の建物件数を、湖岸から200m未満と、湖岸から200m以上400m以内で集計し、構成比率を図5に示した。湖岸から200m未満では、およそ50.9%が観光関連施設となっており、観光空間と居住空間が混在していると言える。観光関連施設の内訳を見てみると、観光施設が49.4%と一番多く、次いで交通施設、別荘、宿泊施設の順に多い。さらに観光施設の内訳を見てみると、飲食店がもっとも多く、次いで土産物店が多い。

湖岸から200m以上400m以内では、観光関連施

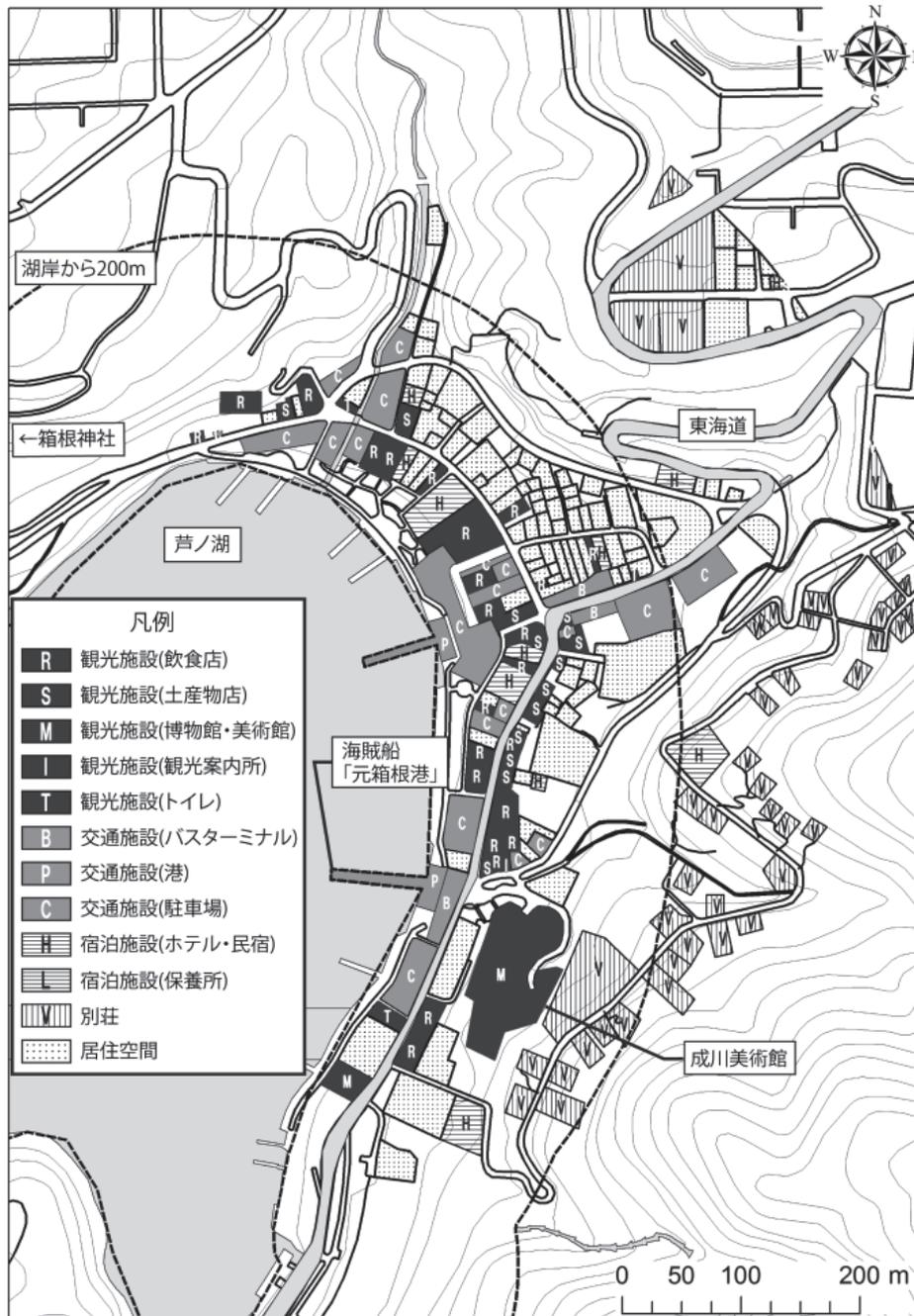


図4 元箱根地区の土地利用

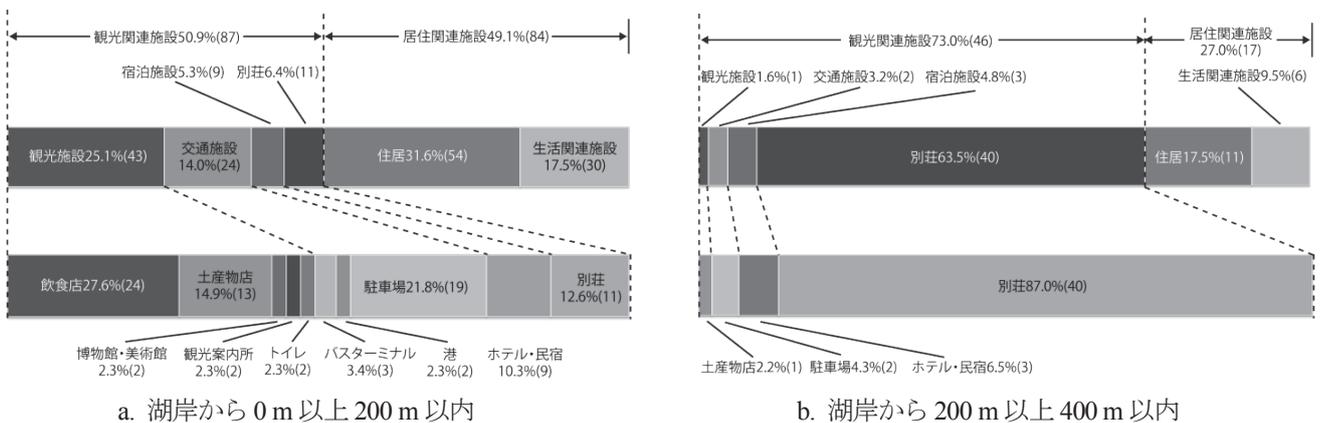


図5 元箱根地区の建物件数の構成比

設が73%と圧倒的に多くなり、その中の大部分が別荘である。

#### 4.3 元箱根地区の空間形成要因

この地区は大きく2つのエリアに分類することができる。一つ目は、湖岸沿いを走る、東海道とそれに付随する道路周辺に広がるエリアである。居住空間と混在しているものの、道路沿いは特に観光用途に特化している。海賊船元箱根港乗り場の近くには箱根神社の第一鳥居（写真2）が立っているが、これは1993年に建替えられたもので、現在では元箱根地区を象徴するような観光対象となっている。元箱根地区には箱根神社の門前町として鎌倉時代から集落が存在していたが、その位置は箱根神社と芦ノ湖に挟まれる場所であり、現在多く建物が立地している場所とは異なる。江戸時代になると、東海道が整備されたことによって、東海道と湖岸沿いを走る道路の交差点より箱根神社方面にのみ集落が発達した（図6）。この交差点より南側に集落が成立したのは明治期である。箱根町地区同様、明治期に避暑地としての利用がされるにつれて、現在のような観光関連施設が開発されていったと考えられる。箱根地区は江戸時代に旅籠や本陣などの建物が立地していたのに対し、元箱根地区の南部は建物が立地していなかった。元箱根地区の多くは明治期になってから開発されたため、箱根地区と比較して大規模な土地利用は少なく、また短冊状の町割りもない。

二つ目は、湖岸からおよそ200m以上離れたところに広がる別荘の多いエリアである。湖岸の地区から斜面を挟んで隔離されており、またほとんどが別荘であることから、別荘地としての空間が形成されていると言える。このエリアの形成要因として、大正時代である1919年～1921年にかけて、箱根土地



図6 1716年の元箱根地区の様子  
（東海道分間延絵図第4巻より転載）

（株）が元箱根地区で別荘を分譲したことが考えられる（箱根町立郷土資料館, 1996）。箱根町全体が避暑地として注目されると、元箱根地区は強羅や仙石原と共に別荘開発が進められた。



写真2 元箱根地区の第一鳥居（2014年9月14日に著者ら撮影）

#### V. おわりに

本研究では、フィールドワークや地理情報システムを利用した土地利用や建物件数構成比などの分析によって、箱根地区と元箱根地区それぞれの空間構成を明らかにした。元箱根地区では湖岸から近いところに観光施設、宿泊施設、交通施設が混在した観光空間が形成されているのに対し、箱根地区では湖岸から近いところに観光施設と交通施設を中心とした空間が形成されている。箱根地区は湖岸から少し離れた場所に、宿泊施設の集積する空間が形成されており、その点で元箱根地区とは異なることが分かる。また、どちらも別荘地空間が存在していることは共通しているが、元箱根地区は斜面の上に形成されているのに対し、箱根地区では斜面の上の他、湖岸沿いにも形成されている。どちらも別荘のある空間を有しているが、元箱根地区は箱根土地（株）による開発であり、箱根地区は個人による開発であったため、その立地には違いが生じた。飲食店、土産物店に関しては、東海道沿いへの立地、建物件数の構成比の点で共通していた。

箱根地区と元箱根地区は、芦ノ湖畔という魅力的な自然資源への近接立地、東海道沿いへの集落形成など、成立背景に関わる自然・社会基盤において共通点を有している。しかし他方で、箱根地区は関所を中心とした宿場町として、元箱根地区は箱根神社の門前町として形成されたという違いがあり、そのことが両地区の観光の特色として、また宿泊施設の

立地や町割りといった空間の特徴の違いとして表れている。しかし、地区全体の土地利用や建物用途に関しては、箱根地区と元箱根地区とで類似点が多く、近接地として類似した開発や規制が行われてきたことを示している。これは両地区の湖岸周辺の観光空間は、どちらも都市計画法上の商業地域に指定されていることから推察できる。また、湖岸から離れた別荘の多い空間は住居系地域として指定されており、商業施設の開発規制がかけられている。

観光空間に表出した景観はその場所の開発の歴史を物語るものである。地域の空間構成やその形成要因を知ることは、現在の開発状態を評価することにつながる。今後は、現在の問題点などを含め、地域計画への応用をふまえた成果として昇華させることが必要であろう。

## 注

1) 以降の箱根の観光の進展に関する記述は、箱根町(2015)のホームページ「町のあゆみ」を参考にしている。

## 謝辞

箱根町立郷土資料館の野坂さんには、箱根の空間形成要因に関する聞き取り調査にご協力いただきました。また、首都大学東京都市環境学部自然・文化ツーリズムコースの現4年生にも各種調査にご協力いただきました。ここに感謝の意を表します。

## 参考文献

- 太田慧, 飯塚遼 2014. マルタ共和国マルサシュロックにおける漁村観光と空間構成. 観光科学研究 8: 99-106.
- 大山正雄. 箱根. 菅野峰明・佐野充・谷内達(編) 2009. 「日本の地誌5 首都圏I」. 東京: 朝倉書店.
- 箱根町 2015. 町のあゆみ: まちのあらまし. [http://www.town.hakone.kanagawa.jp/hakone\\_j/gyosei/aramashi/mati02.html](http://www.town.hakone.kanagawa.jp/hakone_j/gyosei/aramashi/mati02.html) (アクセス 2015年10月12日)
- 箱根町立郷土資料館 1996. 「開け行く別荘地・箱根」. 箱根町立郷土資料館.
- 古谷勝則・油井正昭・赤坂信・岡本里絵 1999. 富士箱根伊豆国立公園における芦ノ湖埋立園地の成立と変遷. 千葉大園学報 53: 59-74.
- 山下亜紀郎 2001. 諏訪湖畔における観光資源の多様性と地域間提携. 地域調査報告 23: 135-145.
- 山村順二 1967. 東京観光圏における温泉観光地の地域的展開—温泉観光地の研究(第1報)—. 地理学評論 40(11): 41-59.

Pearce, D. 1995. *Tourism today: A geographical analysis* second edition, Longman Scientific & Technical.